

こころを測ること

——アンケート調査技法を用いた心理学的測定について——

西村 太志*

東亜大学 総合人間・文化学部 心理学研究室

E-mail: taishi@toua-u.ac.jp

*現所属：広島国際大学心理科学部臨床心理学科 (t-nishim@he.hirokoku-u.ac.jp)

1. こころのとらえ方 —はじめに—

「心理学」に関心を持つ人は非常に多い。それは、心理学を知ることによって、自らの内的世界を正しく知ることが出来るというある種の幻想を抱きやすいために起こることであるかもしれない。また、心理学を学ぶことで、人のこころを知る、すなわち人のこころを「測る」ことが出来ると思うことに由来するのかもしれない。それ故に、心理学関連の講義はどこの大学でも比較的学生の関心の高い分野である。しかしながら、「心理学」の講義を担当する教員の立場としては、最初に学生の持つ「心理学」幻想を取り除くことから講義を始めないといけないのも事実である。その理由の一つとして、市井の人々が持つ「心理学」のイメージと、学問分野としての「心理学」のイメージが乖離していることが挙げられる。

例えば、ABO式血液型の差異で人間の性格は異なるという信念が、日本においては広く普及している（総理府，1987など）。この信念は「自分の友達のA型の人、雑誌などに載っている典型的なA型の人、性格特徴ととても似た行動を取っている。」「自分の周りにいるB型の人、だいたい同じような行動や考え方をしている。」といった経験則に基づく判断を行う

ことにより強化され、血液型ステレオタイプが多くの人達に共有されたものとして形成されている。しかし、実際にはこのような血液型による性格の特徴の差異は、「心理学」という学問分野で「統計的手法を用いた」検討を行うことで、根拠のないものであると否定されている。松井（1991）は、全国から無作為抽出した述べ1万人以上の調査結果（JNN データバンクの4回の調査）をもとにして、血液型と性格の関連を分析している。性格を尋ねた24の質問項目の肯定率と血液型の関連を検討した結果、いずれの項目においても血液型による一貫した差異は認められなかった。「O型だからこういう性格を持ちやすい。」といったことや、「AB型の人、こういう行動をしにくい。」といったことは、客観的事実として証明されていないということである。しかしながら、人々が心理学に対して持つイメージとしては、「血液型性格判断」のようなものを肯定化するような情報を提供するものであるといったものがあるのかもしれない（血液型ステレオタイプ、およびそれに対するネガティブな社会的影響に関する詳しい説明は上瀬（2002）、村上（2005）などを参照のこと）。

また、ある種の心理テストなどが雑誌などに取り上げられ、学生から中高年齢層に至るまでこれらのものに興味関心を持つ人が多い。そし

て、これらの心理テストに対しては、多くの人が「自分にはあてはまっている。」「とてもよくあっている。」と見なす傾向がある。そうでなければ、人々が関心を向けることもない。このことから、その心理テストが非常に精度の高い、正確なものであると判断してよいかというと、全くそうではない。誰にでもあてはまるような一般的な性格記述を、自分だけにあてはまるとみなす現象がある。これは「バーナム効果」と呼ばれ、多くの研究によって示されている（詳細は村上，2005などを参照のこと）。

このように、世間一般の人々が「心理学的には正しいのではないか」と思っていることが、実際にはそうではないことが多い。それは、我々が主観的世界として経験している「こころ」が認知や判断における歪み（バイアス）を持つことに起因する。人は、自らの内的世界を安定的で、良好なものとして、また自己を高揚させておきたいという欲求を多かれ少なかれ持つ。そうでなければ、この世界の中で適応的な生活を送ることが困難になる可能性が高まるからである。この認知的バイアスをどんなに取り除こうとしても、すなわち客観的な視点で物事を捉えようとしても、ものを考え判断し行動する一人の人間である以上、それは不可能に近いことである。そのため、いかにして客観的で、普遍的で、説得力のある結論を導き出すのかということは、心理学においては非常に重要な意味合いを持つ。そのために、心理学を「研究」してきた多くの先達は、測定の方法や、データの標準化の仕方、データ分析の手法に多大な関心を示してきた。すなわち、「適切な」手法を用いたデータ収集を行い、「適切な」方法で分析を行い、「適切な」解釈を行うことが、科学としての心理学の存在理由として重要な意味を持つのである。そうでなければ、心理学は「こころの科学」ではなく、単なる「主観性の主張」になってしまうのである。客観的な視点、言い換えれば最大公約数的な現象把握を行うためには、測定と解釈（分析）を誤らないことが必要である。

本稿では、このような観点に立ち、心理学的

研究技法としての調査技法についての紹介や実施の際の留意すべき点についてまず述べる。これは、卒業論文執筆やレポート作成などを行う際に、最低限理解しておくべき事として必要なことである。なお、心理学的研究技法については、他に観察法、面接法、実験法などが主要なものとしてあるが、それらについては本稿では必要最小限の説明にとどめる。また面接法の中でも調査的面接に関することは、西村・内田・原（2006）を参照して頂きたい。また、統計的な内容についてはできるだけ省略をしているが、当然統計の知識も必要となる。それに関しては引用文献として示しているいくつかの書籍を参考されることをお勧めする。

さらに、調査と社会の接点という観点から、総合人間・文化学部で平成18年度から導入予定の社会調査士の資格についての概要についても触れる。

2. こころの測り方としての調査技法

何かを測るということは、言い換えるならばデータを得るということである。データとは「あるテーマ・仮説を調べようとする際に、ある設定に基づいて組織的に集められたテーマに関する情報」の事であり、「目的や仮説に応じて設定され収集されたもの」を指す（岩淵，1997を参照）。データには、主に言葉や文字を用いて表現する質的データと、数字を用いて表現する量的データの二種類が存在する。それぞれのデータにはその目的に応じた長所・短所もあり、一概にどちらの種類のデータが良いとは言えない。

心理学分野においては、主として実験心理学系の分野や調査を主とする社会心理学系などでは量的データが扱われやすく、臨床心理学系や文化・社会的背景を考慮する比較文化心理学、エスノメソドロジーなどに関連する分野では質的データが扱われやすい。また、幼児や児童などを対象とする発達心理学などでは、質的な観察を量的データに適切な手順を用いて変換することも多く行われる。しかしながら、これらの

分類はあくまでも目安であり、社会心理学を標榜してフィールドワークを重視し、質的データを多用する研究者もいれば、多変量解析などを駆使して量的なデータ解析を行う臨床心理学者も存在する。したがって、心理学を学ぼうとするものは、質的データと量的データそれぞれの特徴を共に理解し、対象や明らかにしようとする対象、研究の目的に応じて使い分けることが重要である。

質問紙などを用いた調査においても同様で、量的なデータ測定と質的なデータ測定がある。ここで重要な考え方は、データをどのような基準で測定するか、すなわち「ものさし」をどのように設定するかである。これを「尺度」といい、測定しようとするも対象の特徴により、四種類の尺度が設定されている。これは、名義尺度・順序尺度・間隔尺度・比率尺度と呼ばれ、それぞれが示すことのできる特徴などが異なっ

ている（表1）。データ測定の際には、調査対象のもつ特徴、および自らが測定したい変数の目的、最終的にどのような結論を導きたいのかという仮説構築の内容から、これらの尺度を適切に設定する必要がある。

表に示しているように、名義尺度による測定よりも、間隔尺度、比率尺度による測定が、後の統計的処理が可能になるという利点がある。そのため、質問紙などを作成する際には、単なる「はい・いいえ」といった回答を求める質問よりも、アンケート調査などで頻繁に行われるリッカート尺度の評定法（反応系の例：1.あてはまらない、2.どちらかといえばあてはまらない、3.どちらともいえない、4.どちらかといえばあてはまる、5.あてはまる）やビジュアルアナログスケール（VAS:10cm 程度の実線を引き、両端に対となる2つの反応をおき、自分が当てはまると思うレベルに実線上に印をうたせ

表1 尺度の水準とその特徴・目的

尺度の水準	特 徴	可能な統計処理	例
名義尺度	<ul style="list-style-type: none"> ○数としてではなく、単なるレターや記号としてたまたま数字を用いている ○同一のものや同種のものに同じ数値を割り当てる尺度 ○同一性を示す 	最頻値 情報量 χ ² 乗検定など	背番号 クラス番号
順序尺度	<ul style="list-style-type: none"> ○各対象に割り当てられた数値が測定値間の大小関係のみを表す場合 ○大小や肯定などの順位関係は明らかだが、その差異は表現しない ○同一性・順序性を示す 	中央値 四分位偏差 順位相関係数など	成績順 レースの着順
間隔尺度	<ul style="list-style-type: none"> ○順位概念の他に値の間隔という概念が入ってくる ○大小関係が表現できるだけでなく、その差や和にも意味がある ○同一性・順序性・加法性を示す 	平均と標準偏差 ピアソンの相関係数 t検定 分散分析 ほとんどの統計処理は可能	温度 評定法に基づくリッカート尺度 標準得点
比率尺度	<ul style="list-style-type: none"> ○原点0（ゼロ）が一義的に決まっている ○測定値間の倍数関係（比率）を扱うことが可能 ○間隔尺度に原点を加えたもの ○同一性・順序性・加法性・等比性を示す 	あらゆる統計処理が可能	長さ（身長） 重さ（体重）

（出所） 岩淵（1997）を参考に筆者作成

表2 調査法の長所と短所

長 所	短 所
1) 調査対象の自然な状況での特徴を把握することができる	1) データの分析から、変数間の因果関係を特定するのが困難（パネル調査では可）
2) 匿名性が保証されていれば、被調査者の特徴をほぼ正確に把握することができる	2) 法則性や規則性を明確にするための方法としては、不十分な部分がある
3) 比較的多くの変数に関する情報を一度に入手することができる	3) 被調査者の匿名性があるため、回答の真偽を確認することが困難な場合が多い
4) 短時間に多くのデータを集めることができる	4) 集団で実施することが多いため、設問や回答の仕方に工夫を必要とする
5) 実験法よりもデータ収集にかかる各種のコストが少ない	5) 研究の目的を明確にしておかないと、収集したデータを無駄にしやすい

(出所) 岩淵(1997)を筆者が一部改変

るもの)を用いた測定の方が望ましいと言える。これは、言い換えるならば、名義尺度レベルの測定より、間隔尺度レベルの測定の方が望ましいということである。しかしながら、測定しようとするものがそもそも名義尺度レベルの測定しかできないものであるならば、当然名義尺度レベルの測定を行わなければならない。質的な形でしか得られないものを、無理矢理量的に取ろうとすることは、データを適切に得ることができなくなり、調査の失敗への第一歩である。

さらに、調査における測定において重要なことは、データの適切性の基準の問題である。心理学などで測定されるデータはほとんどの場合間接測定である。走る速さや身長、血液中の酸素濃度などは機器を用いれば直接測定することができるが、こころの状態を目に見える形で直接測るということは少なくとも調査形式では困難である。身体の疲労の程度を、血液中のある種の物質の濃度や血圧などで測定することは、それが疲労の程度を反映する指標であれば可能だが、どの程度疲れていると自分が感じているか(主観的疲労度)をパソコンが瞬時に教えてくれることはない。そこで、測定しているものが適切であるか否かを「妥当性」と「信頼性」という2つの基準で捉えることが多い。妥当性

とは、測定しようとしているものと実際に測定しているものがどの程度一致しているのか、測定しようとするものをどの程度的確に測定しているのか、測定しようとしているものをどの程度確実に測定しているのかという、測定の一致度、的確性、確実性に関わる概念である(岩淵, 1997)。信頼性とは、測定の際の誤差の少なさ、測定しようとしているものをどの程度正確に測定しているのかという測定の正確さにかかわるものである(岩淵, 1997)。直接測定でこれらの概念を例えるなら、妥当性の乏しい測定は身長を測定するために体重計を用いるようなものであり、信頼性の乏しい測定は100m走のタイム測定をするために砂時計やゼンマイ式柱時計を使うようなものである。

心理学のアンケート調査は間接測定がメインであるが、しっかりと概念的な整理をして臨まない、妥当性・信頼性に乏しい測定を行ってしまうことがある。それは直接測定で挙げた悪い例えのようなことを行っていることと一緒である。ただ、間接測定の場合それに気づかないことも多いので、十分な訓練が必要である。

また、調査法には長所もあれば短所もある(表2参照)。自らが測定しようとするデータや対象の特徴、調査実施における様々な制約(調査までの日程、調査に使うことのできる時間、

調査を行う場所の環境など)を考慮した上で、できるだけ望ましい方法を取る必要がある。

これまで述べてきたように、データはただ闇雲に収集しても意味はない。測定したデータが価値のあるものであるのかどうかの判断が非常に重要となる。データ評価の基準には、いくつかの条件がある。その中でも特に重要なものとして、データ収集時期の適切性と、母集団(調べようとする全体)を正しく表現しているのかという代表性、測定対象の妥当性と信頼性、対象属性に対する測定の精密性と、他のデータとの比較可能性、データの共有可能性(公共性)と再現性などを挙げることができる。

3. 質問紙法と心理検査法の違い

心理学、とりわけ臨床心理学の領域では、心理検査を実施することがある。その中には、言語的な報告を用いた、質問紙形式の心理検査もある。代表的なものとして、人格検査として用いられる MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory)などを挙げるができる。MMPIは他の検査に比べて容易な実施が可能である(田中, 1990)。

検査法と比較して、質問紙法の利点として宮下(1998)は以下の二点を挙げている。第一に、質問紙法では異常性に限らず人間の幅広い健康な側面も捉えることが可能であるが、検査法の多くは「異常」を弁別しようとする方向性が強い。第二に、質問紙法では、実施・処理する側に、特別な技能は要求されない(当然基本的な統計の知識や、質問紙作成のノウハウは必要であるが)けれども、検査法では実施・分析する側に、特別な技術が必要とされるものが多い。これらのことから、アンケート調査などの質問紙法では通常、「正常」「異常」の診断やそれからのズレの程度などを知ることは難しいが、「正常」「異常」を含む多様なサンプル集団に対して比較的容易に利用でき、その特徴を抽出できるという利点がある。したがって、多数を対象に行う質問紙形式の調査で、ある特徴に該当するサンプルがほとんど存在しないといっ

た調査は適切なものではない。

4. アンケート調査を行う際に注意すること

質問紙の作成の手順に関して、大まかなフローチャートを図1に示す。質問紙を作成する際には、この流れに沿った作成が必要である。特に、本調査の実施の前に予備調査を行うことが最も重要である。学生の卒論などであれば、同じゼミのメンバーなど調査対象者にはならずなおかつ調査の背景などについてある程度共通の認識を持つ人と、調査内容を知らない人の両方に予備調査の実施をしておくことが必要である。なお、当然のことながら、予備調査のデータは、仮に項目がほとんど同じであっても、本調査のデータと一緒にして後の分析を行ってはいけない。また予備調査に協力してもらった人

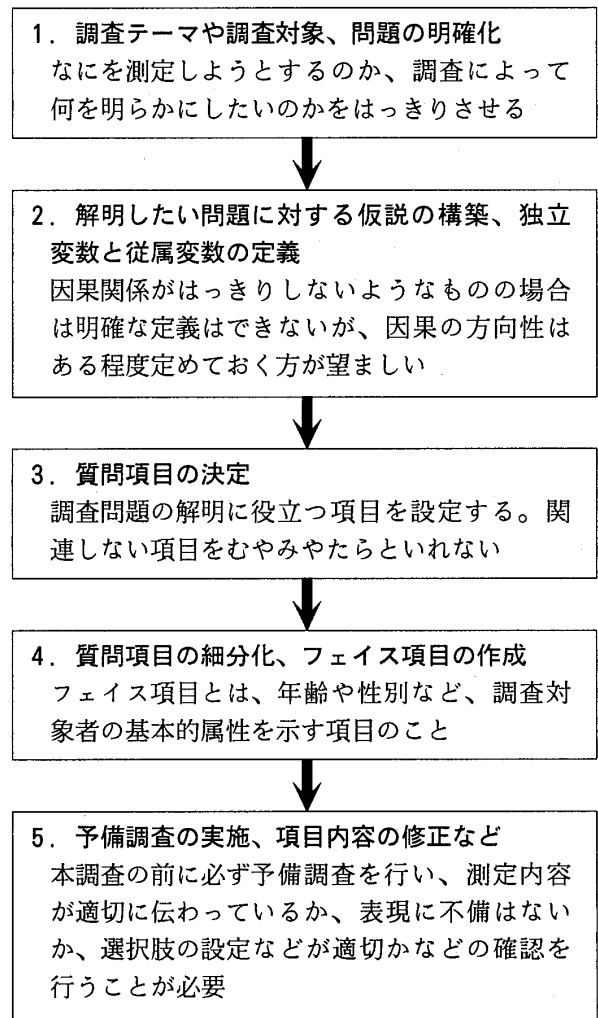


図1 質問紙作成の手順のフローチャート

を、本調査の対象者とすることも避けるべきである。

次に質問紙調査を行う際に、留意すべき点を、質問紙作成と調査の実施について、いくつか重要なものを表3に示す。ここに示した事柄

以外にも注意すべき点はあるが、それらについては井上・井上・小野・西垣（1995）などを参照すること。

表に示したような事柄に最低限注意をしながら、質問紙を作成することが必要である。その

表3 質問紙作成の注意点

内 容	備 考
1) 解明したい問題に関連した質問や仮説に基づいた質問を選ぶ	関係ないことを尋ねても問題の解決にはならない
2) 人によって違って解釈されやすい用語はその意味を明確に規定しておく	例：たくさん経験しているという場合の「たくさん」の解釈のズレ、「彼の価値観は正しいと思う」というときの「価値」の意味
3) 曖昧な表現の質問はしない	例：「収入はいくらですか」と尋ねる場合、それは月給か年収なのか、手取りか税込みか
4) 短くて簡潔な文章にする	長い文章は、解釈の誤りを引き起こす
5) 調査対象者の多くが知らないと思われることを質問しない	「わからない」という回答が大半を占めるデータからは何の解釈もできない
6) 事実に関する質問と評価に関する質問は区別する	例：収入の実際の額と、その収入に対する満足度は異なる
7) 二つ以上の事柄や論点を一つの質問としてしない（ダブル・パーレル質問はしない）	例：「あなたはよくテレビや新聞をみますか」と尋ねると、両方よく見る人と、片方だけよく見る人を区別できない
8) 誘導質問をしない、また質問の回答を偏らせるような尋ね方をしない（イエス・テンデンシー質問）	例：「この法律について改正反対の人が多数を占めているという世論の流れがありますが、あなたはこの法律を反対しますか」、「〇〇に賛成ですか」と尋ねると賛成が多くなりがちなので「〇〇には賛成ですか、それとも反対ですか」といった中立的な質問が望ましい
9) 人々の一般的な態度か、個人の行動を尋ねているのかを区別する	例：「選挙でどのような人に投票しますか」と「あなたはこの前の選挙でどのような人に投票しましたか」は、前者は一般的な態度であり実際の行動ではなく、後者は実際の行動である
10) 建前的な回答をされないような工夫をする	間接的な質問を主題と関連づけて尋ねる等の工夫が必要
11) 質問の順序は回答に大きな影響を及ぼすために、十分考慮して配置する	特に最初の質問が大事であり、最初の質問は調査対象者の興味を引きやすく、調査テーマに直接関連するものが望ましい。また自由記述質問や選択肢が長すぎる設問はさけ、できるだけ簡単に答えることができるものを配置することが望ましい
12) 回答様式の配慮が必要	自由記述回答なのか、選択肢法の回答なのか。選択肢にも二者択一法や順位法、評定法などがあるため、適切な聞き方をする必要はある

（出所） 井上ら（1995）を参考に筆者が作成。

際に重要なこととして三つのことを示しておく。第一に、回答者が答えやすい形式を心がけることである。対象の年齢層によっては、漢字にふりがなをつけたり、字の大きさを大きくしたり行間を広く取るといった工夫が必要である。第二に、研究者側の尋ねたいことが相手に適切に伝わるような文言の工夫が必要である。質問紙作成の際には、構成とワーディングに最も時間を割くべきである。第三に、後の処理のために、データ入力や統計分析のビジョンをしっかりと描いておくことである。これは、仮説をきちんと立てて臨むということとも一致することである。分散分析デザインで統計処理を行う予定であるならば、二者択一形式の回答様式などは不適切である。分析手法を意識した回答様式の設定が必要である。

5. 調査の社会的貢献—社会調査士資格の概要—

近年、選挙が実施される時期になると、多くの新聞やテレビ局などが世論調査を行い、議席数の予測などを行っている。また、専門誌から大衆紙に至るまで、様々な調査が行われ、その結果から論評や世論形成がなされることがある(調査データを歪めて解釈し、それが世間に広まった事の例については谷岡(2000)などを参照のこと)。民主主義的社会においては、客観的なデータに基づく議論は活発に行われて然るべきものである。

このような社会における調査の重要性に対して、学術的立場から貢献をするために、「大学・大学院等における社会調査教育の向上を図り、社会調査知識と技能をもつ人材の供給と、実務に携わる者に対する研修あるいは社会調査の重要性に関する啓発活動を通して、社会の期待に応えること」を目的として2003年社会調査士資格認定機構が設立され、社会調査士と専門社会調査士の資格認定業務を行っている(資

表4 社会調査士資格取得のための領域名、および開設予定科目名の一覧

細目	カテゴリー名	総合人間・文化学部で開講予定の科目名
A	社会調査の基本事項	社会調査概論
B	調査設計と実施方法	調査計画実施法
C	基本的な資料とデータ分析方法	人間科学統計法A
D	社会調査に必要な統計学	人間科学統計法B
E	量的データ解析	人間科学統計法C
F	質的データ解析	調査面接・観察法
G	社会調査実習	社会調査実習A 社会調査実習B

格についての詳細は社会調査士資格認定協会のホームページ<http://www.soc.nii.ac.jp/jcbsr/>を参照のこと)。

社会調査士は科目認定審査を事前に受けた大学での科目取得者を対象に、大学単位での申請により社会調査士資格認定協会が認定するものである。社会調査士資格取得のためには、各大学(機関)に設置されている七つの領域に対応する授業科目単位を取得する必要がある(表4参照)。

東亜大学総合人間・文化学部では、この資格取得の科目整備を行い、平成18年度から対応する科目の新規開設、および既存科目の名称変更を実施する予定である。各領域に対応する開設予定科目名を表4に示した。

社会調査士資格は、取得する学生に対して、大きく二つの利益を提供することができる。一つは、就職活動時の資格として、単位取得が順調ならば三年次に見込み申請ができる点である。マスコミ関係や出版関係、また官公庁などへの就職を希望するものにとっては、しっかりとした調査ができることがアピールポイントになると思われる。もう一つは、心理学や健康科学、スポーツ学などの領域において、卒業研究で調査などを行いデータの収集を行うノウハウの基礎教育を提供することができる点である。調査を円滑に行う際には知識だけでなく経験も重要な要素となる。実習科目などに

において、基本的な必要最低限の経験を積むだけでも、失敗しない卒業研究のためには重要であると思われる。

取得を希望する学生は、ガイダンス等での説明を聞き、それぞれの単位修得をしていただきたい。

6. 調査は難しい、でも楽しい

—まとめにかえて—

筆者は着任してから三年間、心理統計法の講義や卒論演習の中で、調査について様々な説明をしてきた。そのなかで「調査を安易に行えるものであると思わないで欲しい。」ということをも再三繰り返して述べてきた。それは、卒業研究に取り組もうとする学生の中で、「調査は楽にできそうだからそれでいいや。」といった考えの人が多かれ少なかれいたことに由来する。この考えは、学生だけではなく、それ以外の層にも多少なりともあるのではないかと思うこともしばしばあった。確かに調査は、実験法や観察法に比べれば、また非常に多くの事例と接したり、莫大な数の書物を読み解くことに比べれば、行う時間は短くて済み、場合によっては一瞬で終わるものである。しかしながら、その質問紙を作成するために準備をする時間、また項目内容を推敲する時間、その後のデータ収集に費やす時間を考えると、費やす労力はかなりのものになる。これまで述べた調査のノウハウだけ抑えても、状況に臨機応変に対応できなければ失敗の調査になってしまう可能性もある。調査を実施することは、とても難しいことである。そのため、「調査をする。」ということをも安易に表明することは、できるだけ避けてもらいたいと調査に携わり研究をしてきた一人として思う。

しかしながら、調査は楽しい部分もある。何度も推敲し、綺麗に質問紙を作成し、目の前で多くの人が回答してくれ、そのデータを丁寧に分析すると、自分が考えていた仮説を支持する結果が示される。このプロセスは何物にも代え難い充実感をもたらしてくれる。最初調査のこ

とを何も知らなかった学生が、多くの知識を吸収し、調査を不十分な部分はあるが何とか実施し、卒業論文の形式としてまとめていくことは、個々の学生が大学生活で最大の達成感を得ることになる。自分の知りたいことが、何らかの調査をしっかりと行うことで明らかになると考えたならば、是非しっかりとした基盤を身につけた上で挑戦していただきたいと思う。

調査についての知識と技術を身につけることを、筆者は講義の中で料理に例えて話す。料理を作ろうとするときには、まず献立を考える。これは、調査のデザインを考えることである。次に食材を求めに買い物に行き、できるだけ料理の理想に近い食材を手に入れようとする。ここで言う理想とは、最高級の食材を集めることだけではなく、そのときに手に入れることのできるベターなもの、また旬の食材を選ぶことである。さらに、肉は肉屋で買うように適切な店を選ぶことも意味する。これは、調査において、仮説検証のために適切な人々を調査対象として選択し、その対象に応じた適切な測定を行うことである。そして、実際に道具を使って料理を作る。これは、調査の後に適切なデータ分析を行うことである。このように調査というのは何も特別なことではなく、きちんと手順を踏んでいくなかでの一つのプロセスなのである。多くの人が調査に関心を持ち、適切な調査技法を少しでも習得していくことを願う。また、適切な方法で調査を行うことが、「こころ」の理解にとって重要な意味を持つと信じて拙稿を終えたいと思う。

【引用文献】

- 井上文夫・井上和子・小野能文・西垣悦代 1995
よりよい社会調査を目指して 創元社。
岩淵千明(編) 1997 あなたもできるデータの
処理と解析 福村出版。
上瀬由美子 2002 セレクション社会心理学 21
ステレオタイプの社会心理学 サイエンス社。
松井 豊 血液型による性格の相違に関する統計
的検討 東京都立立川短期大学紀要, 24, 51-
54.

- 宮下一博 1997 質問紙法による人間理解 鎌原
雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤 潤（編
著） 心理学マニュアル質問紙法 北大路書
房 Pp1-8.
- 村上宣寛 2005 「心理テスト」はウソでした。
日経 BP 社.
- 西村太志・内田裕之・原夕紀 2006 心理学教育
における調査的面接技法の実践について 総
合人間科学（東亜大学総合人間・文化学部），
6.
- 総理府 1987 昭和 61 年版世論調査年鑑 大蔵省
印刷局.
- 田中富士夫 1990 質問紙法 土居健郎・笠原
嘉・宮本忠雄・木村 敏（編） 異常心理学
講座第 8 巻 テストと診断 みすず書房
Pp17-70.
- 谷岡一郎 2000 「社会調査」のウソ——リサー
チ・リテラシーのすすめ 文芸春秋.